

平成31年1月1日発行 春燈/第74巻第1号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2019 January

1 月号



主宰の句

安立公彦

露けさの窓や遙けき筑波山
(栃木二句)

神武帝玉座に凜と秋の山車
(山車会館)

草紅葉帰らぬひとの面差しに

目路なべて残んの色や神の留守

長きわが影と連れ立つ小春かな



成瀬櫻桃子の句

まづしきものに眠る幸あり雪つもる

『風色』昭和四十八年

三好達治の詩集『測量船』の「雪」を思い浮かべる句である。上五が字余りではあるが、一気に読めて苦にならない。現実と希望を持った若き夢ある作品である。

ちなみに達治の「雪」は

（太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ）

たった二行の詩であるが、忘れられない詩である。

本田 保

成瀬櫻桃子の句

肩抱きて雪の匂の紬かな

「俳句研究」昭和五十八年

紬の着心地の良さはよく言われるが、そのひんやりとした肌触りは触れた者にしかわからない。この句のリアリテイーと詩情は「雪の匂の紬」にある。外気の冷えにつれ燃えあがるころ。大人の恋であったにちがいない。暗い紬の地色は夜と心の闇を連想させる。

降りしきる夜の雪は二人だけの世界を浮かびあがらせ、様々な確執を昇華させていく。櫻桃子五十八歳の作。

浅木ノエ

燈下集



○ 江草 礼

義経に余りし黄菊弁慶に
楯木並ぶ静寂に育つ茸かな
存在感示す紅茸森寂し
来年の旅を約して茸汁
八ヶ岳は茸ばかりや神在す

○ 岩永はるみ

秋冷や舟運しのぶ綱手道(秘本五句)
竹林の足音の湿り秋深む
例幣使街道風と抜けけり秋桜
水琴窟のまろき音色や秋澄めり
文豪の墓碑にまみえて秋惜しむ

○ 林 紀夫

世の中はもめごと多し地虫鳴く
人の世の輪廻の証散る紅葉
志の未だ成らずや露時雨
日もすがら書棚の整理秋ぞ行く
よもすがら語り明かさむ冬隣

○ 小張 志げ

背を搔いてくるる手の欲し雁の頃
塔に雲なければ淋し秋夕焼
身知らず柿滅私の情のありにけり
どびろくのぶつくさ不満醸しけり
紅絹で拭く象牙の根付け紅葉忌

○ 中野さき江

蛇笏忌や影のただしき山ここに
月の出を待つ閑かさを深めけり
秋淋しつと口紅を変へてもや
過去の傷問はず語らず天高し
暮れ残る神鶏の白秋さびし

○ 栗原完爾

絵屏風を式部ぬけだす十三夜
葛あらし護岸に埋もるる鎮魂碑
うそ寒や夜の貌うつす窓硝子
寺町の屋根くろぐろと秋しぐれ
裸木になりゆく一樹仰ぎけり

○ 小菅礼子

溝萩や可憐誰にも好まるる
一休みの濡縁の先実むらさき
声にせず言葉の浮かぶ暮の秋
打つ人なき古き碁盤や秋日落つ
衿元に風の寄り来る十三夜

○ 本多遊方

零余子飯前世の記憶あるやうな
古稀近し夜食はとらず句帳閉づ
眼前の妻は素つびん山粧ふ
分骨の供養請はるる文化の日
無始よりのこの晩秋の大櫛

○ 武田巨子

秋声や川藻に揺るる蔵の影
みむらさきもつれ添ふまま色深む
まなうらの父の闊歩や蓮の実飛ぶ
古戦場間近き里や崩れ築
そぞろ寒肩尖らせて繰る雨戸

○ 諸岡孝子

錆鮎を夕べ烟らす対の皿
行合の川音昏るる秋あかね
残菊の咲くやかたみに秋となり
寄り難き書見の夫や秋小寒
秋時雨プルシャンブルーの海の原

金色の夢に寝返る菊枕

ひよんの笛しばし濁世を離れむか

木犀の街やデジャビュをふりきれず

笑み栗の笑ひ過ぎてはこぼれけり

母在さぬ無月の家を訪ひにけり

○ 小泉三枝

真白な法衣の貫主照紅葉

筆太に書く短冊や秋深し

身に入むや眼鏡に重ぬる拡大鏡

庭園の芝の起伏や鱗雲

行く秋や目つぶりて聴くスタインウェイ

○ 菅澤陽子

○ 平野加代子

大銀河宙のひび割れかもしれぬ

こと無きを得てやからすみ厚く切る

絵画館を逆三角に黄落す

元号無き手帳手にして秋惜しむ

耽読の本を旅する夜長かな

○ 田嶋洋子

富士筑波男体栃木の秋高し

夜長の灯分かつ兄弟子妹弟子

悲しみの彩美しく美術展

名園へと木犀の香に背押され

紅葉や小舟に刻を遊ばせて

○ 白神知恵子

下校挨拶輪唱めくや穂田の風

小鳥来る寺の古地図に凝りをれば

文字若き伝言板や色鳥来

栄転と言へど別れや竹の春

隨身門覗けば秋蚊飛ばしけり

○ 長谷川歌子

方言のやすらぎに居て芋煮会

神送り幹のかがやく竹の道

針の穴焦れて通らず日短

枯葉粉々季節の土となりにけり

熟年のおしやれ上手や帰り花

余言

安立公彦

落慶の間近き塔や新松子

佐藤 信子

十月本部句会での特選句の一つ。講評を記す。

奈良での景と思われる。長かつた社寺の工事も終わり、落慶供養の日も近い。この「塔」は五重塔か。五重塔の五層は、地・水・火・風・空の五つを示す。釈尊の遺骨即ち仏舍利を祀る塔。その五重塔への思いが善く感じられる。作者は今、青空を背にして建つ五重塔を仰いでいる。塔には崇高な風格がある。傍らの松の大樹に折から新松子が見える。それは恰も塔の落慶を祝しているかのようだ。

ここにも等高線や秋の空

沼田 桂子

「等高線」は周知の通り、地図に記した土地の起伏の曲線。それを「ここにも」とみごとに表現で結んだ句である。言われて見ると頷くばかり。ここにも等高線を設けることにより、私たちは平衡感覚を保てるのだ。

作者には平成三十年度の春燈誌の表紙絵を描いて貰っ

た。四季それぞれの絵は、それを手にする私たち春燈人の心を豊かにし明るくした。青磁の器、夏雲、金魚、樗大樹、それぞれに詩があり気力があつた。感謝あるのみ。

石ひとつおきたる墓の野分かな

鷹崎由未子

「山本有三の墓」の前書がある。今年の勉強会は折からの台風の前だったが無事に終わり安堵した。

この墓は栃木近籠寺に眠る山本有三の墓碑。量感のある自然石に土屋文明の筆跡が残る。この句当日の出句には無かった。勉強会は会が終わるとそれで終了ではない。再考は不可欠だ。掲出句、「石ひとつ置きたる墓」と、表現は客観的だ。しかし内容は深い。それはまた山本有三の文字にも通う。野分後の天の青さを連想させる句である。

東洋城の扁額寂びて秋気満つ

尾野奈津子

栃木駅前から北東に伸びる蔵の街大通りは、市役所を過ぎた四つ角の先に例幣使街道が大きく曲折し、近くに岡田記念館がある。更に岡田家二十二代当主の建てた、翁島という別荘が建っている。用材は全て銘木と言つた。

その二階の一室に、松根東洋城の扁額が掲げられている。東洋城は良くこの地を訪れていた。裏庭は鬱蒼とした草叢

である。この「扁額」は、「無歴史」と記された額。松根東洋城という俳壇の一方の巨星を思うとき、この句の「寂びて」に、一陣の秋冷を覚える。

水琴窟のまろき音色や秋澄めり
岩永はるみ

今回の勉強会で水琴窟を聴いたのは、塚田歴史伝説館の庭園と、山車会館の入口脇の二か所だった。音色はそれぞれ特徴があり、心地よい音はひと時気持を和ませる。その考案は江戸時代に遡ると言われる。

水琴窟にしても蔵屋敷にしても、栃木という街は伝統をしっかりと後世に遺している。古人の情緒とそれを利用して施設の知恵に感謝するばかり。この句「まろき音色」を、「秋澄めり」で結んでいる表現がみごとだ。

手をのべて川面の秋を掬ひけり
小倉 陶女

この句、栃木市西部を流れる巴波川^{うずま}の遊覧船での作。巴波川は栃木から思川を経て利根川に至る。栃木市の案内図で馴染の巴波川の背景には蔵が見える。塚田家の蔵や展示場である。そこに架かる幸来橋の下手が遊覧船の乗場。

「手をのべて」が善い。いかにも女性の仕様だ。「川面の秋」とは何か。川面に写る蔵の影にも、大きくカーブするその扉の影にも紛れもない「秋」を感じるのだ。それは「掬

ひけり」という動作にも善く表現されている。写生と心象がバランス善く調和している句である。

秋寂ぶやバリカンのこる理髪店
大文字孝一

先述の岡田記念館には代官屋敷がある。門を這入った奥に明治時代の床屋跡という一画が残っていた。今の理髪店の設備とは異なり、客の坐す腰掛にも手の込んだ装飾が付いている。今にも来客がその椅子に坐るような思いがした。そして「バリカン」が正面の鏡台に置いてあった。

普通なら、バリカンもあるで終わるのだが、この句はそれを一句の核とした。「バリカンのこる」が善い表現だ。

さやけしや船唄響く蔵の街
荒井ハルエ

「川面の秋」の句の鑑賞で触れたが、巴波川は瀬戸河原橋の所で二つに分かれ、そこに小振りな堰がある。遊覧船の行き来はそこ迄らしい。川面には、真鯉、緋鯉が群れている。俳人協会の『栃木吟行案内』には、その数十万尾とある。遊覧船と言っても小型の舟。

今その舟から船頭の唄う船唄が聞こえて来た。川の向こうには塚田家の蔵が続く。この句「さやけしや」と切り、下五を「蔵の街」と名詞で止めている。俳句の典型的な形である。一句に情景とともに趣が生まれている。佳句だ。

春燈賞（抄）25句自選

持田信子



「通りゃんせ」路地ぬけて行く初天神
鸞替の清めの太鼓ひとつ打つ
筆塚は大硯なり梅ふふむ
陶片を波間に拾ふ実朝忌
鎌倉を俯瞰の鳶や山笑ふ
魚は氷に上り浮上の潜水艦
くもり日の通草の花の雌雄かな
今日生くるいまの幸せ幣辛夷

蓬摘む指にみどりの香を深め
好奇心まだありつくね芋植うる
アカシアの花や見返り峠越ゆ
麦秋や当主の守る長屋門
雨戸引く音に寄り来る緋鯉かな
真一文字に声の飛び交ふ鮎の糶
荒梅雨や坂東一の仁王像
迷ひ込む太郎の世界夏館（岡本太郎美術館 句）
夏空へ思慕膨らます母の塔
数珠玉や記憶の糸をたどる音
己が忌は月の沙漠へ旅立つ日
喜んでくるる人あり大根蒔く
わが影を細身に伸ばす秋入日
椎の実の降るや一張一弛の地
豊の秋百戸の衆の村おこし
海光や濃淡のある冬菜畑
余白なき年振り返る去年今年

春燈賞（抄）25句自選

平沢恵子



集ふ子の背丈それぞれ今朝の春
女正月プリンゆらせる笑ひかな
石段にゆらぐ光芒実朝忌

春愁の影ひく若きアスレート
少年にためらひの笑みさくら貝
春灯白湯のまろみをわかち合ひ
紋白蝶しづかな日向つくりをり
春禽や音楽堂の屋根の鏝（白比金）

落椿裏返るまま庭暮るる

牡丹より牡丹へ青き風わたる

口中のミント溶くるや濃紫陽花

涼しさの縁側に壺ひとつかな

雨蛙清く正しく葉のうへに

開国の港音なく虹立ちぬ（下田）

日にのぼる沼のにほひや土用入

ごきぶりの艶のあはれを打ちにけり

富士鎮む三百六十度の秋気

父の忌や月見団子に餡添へて

手のひらの熟柿重ると母のこゑ

子の掛くる天神の絵馬新松子

ぎんなんの白磁に点る宵の席

寒暁に拭ふや醬油瓶の口

短日や垣に隠るる荷風墓碑

じよんがら節の三味に打たるる屏風かな

羽音して雑木林や十二月

当月集

安立 公彦選



○ 平沢恵子

秋霖や沼ゆるやかに息を吐く

あとさきのせせらぎをきく秋思かな

小鳥くる絵皿に溶くる色もやう

恋歌ふおとがひ白く秋灯

後の月汀に水の皺やまず

○ 持田信子

蔵あけて新酒振る舞ふ城下町

秋高し乳鉦豊かに薬医門

軒に干す今日の色なる唐辛子

小坊主や禅寺丸柿鈴生りに

返信の短きメール十三夜

○ 中里よし子

庭木刈るやさやけき風の生れけり

雨に日に十月桜咲きをらむ

夜長の灯消すさびしさのありにけり

せつかちな鴨がダム湖に二羽三羽

師恩しみじみ挿して自祝の冬の薔薇

○ 木村みどり

漢方薬煎ずる妻の夜長かな

志ん生の廓話の夜長かな

茸凶鑑しばし開くや秋の山

つれあひと好み似てきし芋茎汁

栗飯や母の忌修す根来梳

○ 大西由美子

夕闇に木犀の香の深まりぬ

金木屋金平糖の散らばりぬ

見目形佳くて悲しき毒茸

雲一つなき蒼穹の秋思かな

残菊や三面鏡の中の母

春燈の句

安立 公彦選

川風に吾も吹かるる葛の花

手を取られ川原の散歩赤まんま

鯉はねて水泡ひろがる川の面

肌寒の人の恋しき夜なりけり

秋麗や三葉葵の陣羽織

月天心塵捨てに行く裏通り

今もなほ還られぬ街猪群るる

並び立つ巖の塔や照紅葉

夕爾忌の抜いて詩となるねこじやらし

十三夜月に遊びて癒さるる

川衆と呼ばれ棲み古り秋祭

ゆく秋や竹の根力鉢を割る

仲麻呂を偲び仰ぐも無月なる

玉兎てふ銘菓のありぬ今日の月

歩きスマホの人の多さや秋の風

東京 石原 節子

福島 室井津与志

千葉 池田 葉子

東京 遠藤 レイ

桜紅葉散り敷くことも遺跡かな

独り居に二尾の贅沢初秋刀魚

銀ぶらをするやハイカラ赤蜻蛉

音たてて地面を叩く冬の雨

せせらぎに鶴の凝視や魚影追ひ

引き締まる青年の顔新松子

二人目の生るる予定実南天

秋惜しむ同窓会となりけり

大木の葉擦れの騒ぎ神の留守

秋澄むや日の本の空取り戻す

老妻の胸元きりり秋深し

草紅葉束の間の美にあやかると

東京 大森 道生

兵庫 中上 馥子

バンコク 大口 堂遊

